農業農村工学会サマーセミナー2017 報告
Report of JSIDRE Summer Seminar 2017

浅田洋平 1)、○前田顕 2)、辰野宇大 1)、田中宣多 3)、東海林光 4)、大山幸輝 5)、松田壮顕 2)
Asada Yohei1), ○Maeda Ken2), Tatsuno Takahiro1), Tanaka Yoshikazu3), Shoji Hikaru4), Oyama Kouki5), Matsuda Soken2)

1. はじめに

サマーセミナーは，年に一度，農業農村工学会本大会が開催される際に，複数の大学から学生が集まり，農業農村工学に関わるいくつかのテーマに関する様々な議論や，お互いの研究活動についての情報交換を行う学生主体の企画である。発足の経緯は，1992 年に発足したスチューデント委員会のメンバーや学会事務局等の働きかけにより，他大学の学生同士の交流が活発となり，農業農村工学分野の学生同士が議論できる場への欲求が芽生えたことにある（中桐，2015）。2013 年以降一時的に開催が見送られてきたが，一昨年の 2016 年に本企画は復活を果たし，2017 年，そして本年（2018 年）も開催する運びとなった。18 回目の開催であった昨年のサマーセミナー2017 では，「関東で農業農村工学を考える！」をメインテーマに現場見学会やディスカッションを行った。本稿では，その活動内容について報告する。

2. 2017 年の活動報告

サマーセミナー2017 は 2017 年 8 月 31 日～9 月 2 日の期間に神奈川県の日本大学湘南キャンパスと藤沢周辺を会場に行われた。全国の 10 の大学から大学生，大学院生の参加者 20 名が集まり，約 3 日間で現地見学や基調講演を通しての学習，議題を設けてのディスカッションを行った。2016 年と比べ，参加者数が増え，また，学部生の参加者も多かったことは特に良かった点である。

昨年のセミナーでは，『①農業農村工学分野への人材獲得について考える』，『②「近郊農業」や「関東の農業」の中で農業農村工学がすべきことを考える』，この二つのサブテーマ（議題）を通してメインテーマについて考える場を設けた。各議題で時間を設けた上で 1 班 5 人程度のグループに分かれて議論を行い，最後に各グループが議論した内容を参加者全員に対して発表し，活発な意見交換を行った。（Fig.1）

Fig.1 グループディスカッションの様子

①『農業農村工学分野への人材獲得について考える』

近年，大学で農業農村工学を専攻した学生が他分野へ進むケースが多くなり，本分野の人材獲得が課題となっている。2016 年のサマーセミナーでは，「大学生や大学院生の役割」として，当分野を専攻する先輩から後輩に農業農村工学分野の宣伝を行うことやネッ

1)東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo
2)宮崎大学農学部森林緑地環境科学科 Faculty of Agriculture, University of Miyazaki
3)京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University
4)宇都宮大学大学院農学研究科 Faculty of Agriculture, Utsunomiya University
5)鳥取大学大学院持続性社会創生科学研究科 Graduate School of Sustainability Science, Tottori University
キーワード：農業農村工学，広報，若手交流会，サマーセミナー

トワークを築くことの重要性を指摘した。2017 年度では，昨年の議論を踏まえ，学生が普段の学生・研究生活の中で，本分野の宣伝，人材獲得を行っていくためにできることをテーマとし，より具体的な議論を行った。まず，農業農村工学分野に進学する前に当分野がどのような分野なのか知る機会が少なく，高校生や専攻選択前の学生に当分野の魅力がうまく伝わっていないとの指摘があげられた。ディスカッションを通じ，工学分野から生物，社会科学系に至るまで幅広い研究分野を当分野が内包しており，専門性の高さから就職にも強く，多様な魅力があるということを確認した。そのような魅力を高校生へ発信していくことが，第一志望で農業農村工学分野を選んでもらうために学生ができることであるという結論に至った。具体的な宣伝方法については，オープンキャンパスで在学生がポスター発表を行う，SNS や HP を積極的に活用する，高校に出むいて出張授業を行い，分野の魅力をアピールするなど多くの意見が出た。

②『「近郊農業」や「関東の農業」の中で農業農村工学がすべきことを考える』

2017 年の大会開催地であった神奈川県では，大消費地に近いことを活かして畑作を中心とした都市近郊農業が盛んに行われている。本サマーセミナーでは，「近郊農業」，「関東の農業」に焦点をあて，将来的に地球温暖化や人口減少が進む中で，将来の都市の農業がどのようなっていくかを考えていき，その将来の方向性を踏まえたうえで，農業農村工学分野が貢献できることを議論していった。例として，近郊農業従事者の人口減少問題から「機械化や IT を活用した農業」を予想したグループでは，農作業などの経験的知識を数値化して，ビッグデータを構築し，農作業のオートメーション化に貢献するといった意見が出された。その他にも，各学生が時に自分の専門分野を持ち寄りながら，近郊農業の将来像について数多くのアイデアを出しており，サマーセミナーの主目的である学生同士の活発な議論が体現されているように感じた。しかし，今回は 1 テーマ当たりのディスカッションの時間が十分に取れなかったこと等が原因で，議題を詰められず，意見は多く出たものの最終的にサマーセミナーや学生の力で実行に移せるような段階まで結論をまとめられないグループも多く見受けられた。これは反省点として今後の企画に活かしたい。

3.　サマーセミナーの感想について

私，浅田は今回がサマーセミナー初参加だったが，同じ年代の学生たちと同じテーマについて，議論を行い，意見をまとめて，最終的に発表するということは，普段の学生生活ではなかなかできないことであり，有意義で刺激的な時間であった。また，ディスカッションだけでなく，懇親会の場で，全国の農業農村工学分野の学生同士が，お互いの研究や学生生活に触れ，深い交流を持つことは，人脈が広がるだけでなく，自身の研究活動のモチベーションの向上にも繋がり，これもまたサマーセミナーの大きな醍醐味であると考えている。（Fig.2）このようなセミナーは，農業農村工学分野の活性化に繋がり，また次世代の研究者のネットワークを形成するという意味でも非常に重要だと思うため，反省材料を活かし，年々質を高めつつ，サマーセミナーの継続に努めていきたい。

Fig.2　懇親会の様子

謝辞：農業農村工学会事務局の方々，大阪府大中桐先生，参加者の皆様には，サマーセミナー開催にあたり，ご協力頂いた。ここに深く感謝申し上げる。引用文献：中桐（2015）学生自主企画サマーセミナーの歴史，H27 年度農業農村工学会大会講演会要旨集　54-55.